

Title	社会認識と想像力
Author(s)	厚東, 洋輔
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37779
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	厚 東 洋 輔
博士の専攻分野の名称	博士（人間科学）
学位記番号	第 10067 号
学位授与年月日	平成 4 年 2 月 27 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	社会認識と想像力
論文審査委員	(主査) 教授 井上 俊 (副査) 教授 徳永 恂 教授 菅野 盾樹

論文内容の要旨

(目的)

本論文は、「社会」を認識するのに「想像力」が必須不可欠な所以を原理的に明らかにすると共に、社会科学の現場において想像力が実際にどのように作動しているかを、体系的に追求することを目的としている。社会を認識するために用いられる想像力を「社会学的想像力」と名づければ、〈社会学的想像力のメカニズムを理論的に整序すること〉、これが本論文を貫くテーマである。

社会科学と想像力とのかかわりは、長い歴史を持ち、専門ごとに異なった様相を示している。その入り組んだ連関を解きほぐすために、対極にある二つの項の双方から、接近することが試みられている。

まず第一に、「想像力」に関する従来の観念を批判的に検討し、社会認識の視点から体系化する作業。こうした作業の中で「想像力」の働きは合理的に再構成され、社会「科学」のノーマルな「方法」のひとつに登録される。社会認識の過程は、①社会を暗黙的な全体として思い浮かべ、②このぼんやりとした全体に明確な「形」を与え、③この「形」を手がかりに（暗黙に知られている）対象を現前化する、という三つの段階が区別される。想像力とはこの三つの段階を総合化する能力のことで、「全体化された対象に形を与え、それを介して不在の対象を具体的なものとして現前化する力」と定義される。

想像力という多義的であいまいな能力を、社会科学の「探究の方法」として整合化し、科学の方法へと編入して行くために私が選んだキー・ワードが「モデル」、「世界（生活世界）」、「暗黙知」といった概念である。

次に必要とされるのは、「社会科学」に関する従来の観念を再考し、それを「想像力」という見地から、批判的に再構築して行く作業である。

想像力という次元に着目することにより、社会科学の従来からのさまざまな構成分野は流動化され、新しい視点からグルーピングされる。こうした試みの中で、政治学／経済学／社会学／（文化）人類学／民俗学、といった伝統的な専門区分は相対化され、新しい角度からの相関化が図られる。社会科学の「新しい体系」を構築するための手がかりが、「社会学的想像力の類型」という観念である。

社会科学を内部的に再編成するだけでは十分ではない。従来カバーされてこなかった分野を社会科学の中に積極的に取り込む必要がある。そのための第一歩として、社会科学と文学研究とを分かち伝統的区分が流動化される。文学研究のさまざまなテーマのうち、社会科学の諸理論を再検討するための戦略地点として、二つの分野が選ばれる。それが、「地形学的」topo-graphical、および「物語論的」な研究の蓄積である。社会理論を、トポグラフィカルな視点から、および物語論的視点から分析するために、「鳥瞰図的生活世界」および「物語的生活世界」という概念が提示され、彫琢される。

想像力をキーワードに選ぶことにより、社会科学を容易に外側に向かって開くことが可能になる。

（方法ならびに結果）

本論文は四つの部分よりなる。

第一部「社会認識と想像力」では、西欧と日本、社会科学と自然科学、という対比を用いながら、社会認識するために想像力が必要とされる理由、社会学的想像力に固有な特性が総論的に考察される。

第一章「イメージと想像力」で「社会学的想像力」の定義が試みられる。ポイントは、「想像力」と「世界」とを相補的な概念として対応させるところにある。「想像力」とは、全体を表象し・造形し・現前化する力であり、こうした想像力によって作り出されるもの、すなわち「形象化された具体的な全体」が「世界」にはかならない。社会がひとつの世界として、すなわち「全体」社会として存立することのできるのは、社会学的想像力のお陰なのである。

社会科学の出発点は、認識対象である社会が暗黙の全体として知られていることであるが、日本の社会科学にとって、この条件をクリアすることはとりわけ困難であった。

第二章「社会と世間」では、日本の社会認識の用語体系が歴史的に考察され、社会と世間とを一体のものとして取り扱う上で、言葉の面で不備があったことが指摘される。

第三章「Society と Community」では、近代に特有な社会認識にまつわる問題点が考察される。近代の社会科学の場合、個人から出発して社会を捉えようとするので、「社会」は「抽象的全体」となる。直接目で見ることのできない抽象的なものを、具体的な形で現前化させる力こそ想像力にはかならない。抽象的な全体を認識対象とせねばならないところに、社会科学に固有の難しさがある。

社会科学とは、想像力を用いて社会を世界として描き出す営みである。

第二部「世界制作としての想像力」では、社会認識の仕組みが、世界制作の方法という角度から原理的に考察される。

「生活世界」を人々の生きられた経験の全体に明確な形が与えられている状態、と呼べば、生活世界とは明確な輪郭のもとに描き出された社会ということになる。生活世界の構成はいかにして可能なのか？

第四章「地図と迷宮」は、普遍的で固定的な座標系（垂直な視点）のもとでも、あるいは逆に自己中心的な動的な座標系（水平な視点）のもとでも、それが不可能であることが述べられる。視点を、斜め上

から見おろす鳥瞰する境位に設定した時、体験に明瞭な形が与えられる。第五章「鳥瞰図と生活世界の構成」では、「箱庭療法」との比較を手がかりに、その理由が探究される。

生活世界を構成することは、全体社会を認識する上で、どのような意義を持つのであろうか。生活世界は認識されるべき全体社会の「モデル」に相当する。第六章「モデルと社会認識」は、科学的推論の本質をモデルに基づく認識に求め、想像力をモデル論的思考のひとつの部類に位置付ける。社会という世界の制作は、つねに、生活世界の作り替えとして遂行されるのである。

(総括)

第一部、二部を通じて理論的に導出された命題を、これまでの社会認識の歴史とつぎ合わせることを通して、より具体的に肉付けし、検証しようと試みるのが第三部「社会学的想像力の諸類型」である。社会学的想像力は、どのような生活世界がモデルに選ばれているかによって、適切に類型化することができる。第七章「市民社会的想像力」では、西欧の社会認識の伝統が、古典古代以来の「都市」がモデルとされているが故に「市民社会論」と名づけられ、その骨格が取り出される。ホッブズ以来の政治学、スミス以来の経済学、デュルケム以来の社会学を、同一のモデルのヴァリエーションとして取り扱うことが可能になる。

第八章「人類学的想像力」では、主としてマリノフスキーを中心に、文化人類学の業績が論じられ、小社会でのフィールドワーク→民族誌の作成→認識モデルへの転用→大社会認識、という一連のステップを踏むところに、その固有の特徴が見いだされる。

主として柳田国男を中心に、日本の社会認識の特徴を論じたのが第九章「民俗学的想像力」である。郷土(くに)をモデルに国に接近するところに、民俗学的思考の共通性が見いだされる。

「形」といった場合、普通念頭に浮かべられるのは視覚的な図形であるが、社会認識で重要なのは、言語表現に関する秩序化の問題である。第四部「物語と社会学的想像力」では、言語と社会認識との関連が集中的に取り上げられ、議論される。生活世界の構成を可能にする言語使用のあり方が「物語る」という態度であり、物語的生活世界において暗黙裡に想定されているのは、「時間的」な全体性である。

第十章「生活世界の物語的構成」では、私小説論を手がかりに、「物語る」ことが生活世界を構成しうるための条件が特定化され、第十一章「物語的生活世界と想像力」では、生活世界を物語的に構成するために動員されている想像力のありさまが、三つの局面ごとに考察される。最終の第十二章「モデルとしての物語」では、物語がどのような仕方で全体社会に認識するためのモデルに仕立てあげられているかに着目して、社会認識の類型化が図られる。小説と歴史学という隣接分野との距離を手がかりに、「旅の物語」「起源の再構成」「概念の弁証法」という三つの叙述スタイルが区別される。「起源の再構成」は、ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を事例に、「行為の意図せざる帰結」の物語として、また「概念の弁証法」は、マルクスの『資本論』を事例に、「予言の自己成就」の物語として、それぞれ具体化され、整合化することが図られている(なお「旅の物語」については、すでに第八章で論じられている)。

論文審査の結果の要旨

本論文の第一の功績は、「想像力」という、どちらかといえば哲学的・文学的な概念を、社会認識のための基本概念として認知し、社会科学の領域に明確に定位したことにある。その作業のなかで、世界制作論、メタファー論、物語論などに含まれる近年の知見と社会科学の伝統との交流が図られ、単なる網領的マニフェストにとどまらない真摯な理論的考察が展開され、これまでの社会科学の通念や慣例的な専門分野の区分が相対化されている。本論文はまた、その後半部で、ホッブス、スミス、デュルケム、マリノフスキー、柳田国男らの社会認識をとりあげているが、この部分は、社会認識の学説史というフィールドにおいて想像力が実際にどのように働いてきたかを一種のケース・スタディによって発掘し分析した試みとしてユニークな価値をもっているとともに、本論文の理論的考察に具体的な肉付けを与えており、また著者の発想が社会科学の「現場」にしっかりと根ざすものであることを示している。

以上の理由により、本論文は博士学位論文として十分なものと認定する。